

令和3（2021）年度 資源評価調査報告書

種名	ヒラメ	対象水域	北海道（日本海～津軽海峡域）
担当機関名	水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センター、北海道立総合研究機構中央水産試験場	協力機関名	

1. 調査の概要

北海道立総合研究機構水産研究本部中央水産試験場が実施している各種漁獲物・生物調査および北海道立総合研究機構水産研究本部が公表している資源評価結果（和田 2021）による資源量および漁獲量の推移等を参考に現在の資源の水準および動向を判断した。

2. 漁業の概要

北海道におけるヒラメは宗谷振興局オホーツク海側から道西日本海、津軽海峡を経て胆振、日高振興局海域に分布し、日本海と津軽海峡で主に漁獲される。定置網、刺網、へらびき釣りで主に漁獲される。1980年代後半では定置網による漁獲が全体の5割以上を占めたが、近年では刺網による漁獲が増加している（藤岡 2003）。対象海域における1985年度からの漁獲量は1999年度を除いて500～1,300トンの範囲にあり、2016年以降の漁獲は上昇傾向にあり、2019年度の漁獲は921トンであった（図1）。また、近年の漁獲の主体は2～3歳魚となっている（図2）。

3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：北海道では日本海から津軽海峡に多く分布し、東部の太平洋やオホーツク海にはほとんどみられない（藤岡 2003）。水温が上昇する春季に浅海域に移動し、秋季には沖合に分布域を移す。また、9月までは北方向への移動傾向を示し、11～12月には南下する個体が増加する（和田 2021）。
- (2) 年齢・成長：雄では3歳で全長40cm、5歳で47cmに達し、雌では3歳で46cm、5歳で58cm、9歳で68cmに達する（和田 2021）。
- (3) 成熟・産卵：雄では2歳から成熟し50%成熟全長は287mm、雌では3歳から成熟し50%成熟全長は404mmと推定されている。産卵期は6～8月頃で、産卵水深は20～50mである。孵化後の仔魚は浮遊生活を送り、変態期に岸近くに移動する（和田 2021）。
- (4) 被捕食関係：仔稚魚期は動物プランクトン（かいあし類、尾虫類）、着底期の稚魚はアミ類、未成魚～成魚は魚類、エビ類、イカ類等である（藤岡 2003、和田 2021）。

4. 資源状態

北海道立総合研究機構中央水産試験場が公表している資源評価（和田 2021）では、1997年以降の資源量はおよそ1,800～3,400トンの間で推移している。2016年以降は比較的豊度の高い加入により資源重量が増加し、2018、2019年度の資源重量は3,000トン以上となっている（図3）。漁獲量および推定された資源重量から、水準は高位、動向は増加と判断した。

5. 資源回復などに関するコメント

1995年以降、資源管理協定に基づき未成魚保護のための小型魚の水揚げ制限が実施されている。また、1996年以降種苗放流が行われている（和田 2021）。

引用文献

藤岡 崇 (2003) ヒラメ. 「漁業生物図鑑 新北のさかなたち」水島敏博・鳥澤 雅監修、北海道新聞社, 札幌, 232-237.

和田 昭彦 (2021) ヒラメ（日本海～津軽海峡海域）. 2021年度水産資源管理会議評価書, 北海道立総合研究機構水産研究本部.

http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/central/section/shigen/21_japaneseflounder_JST_S_2021.pdf

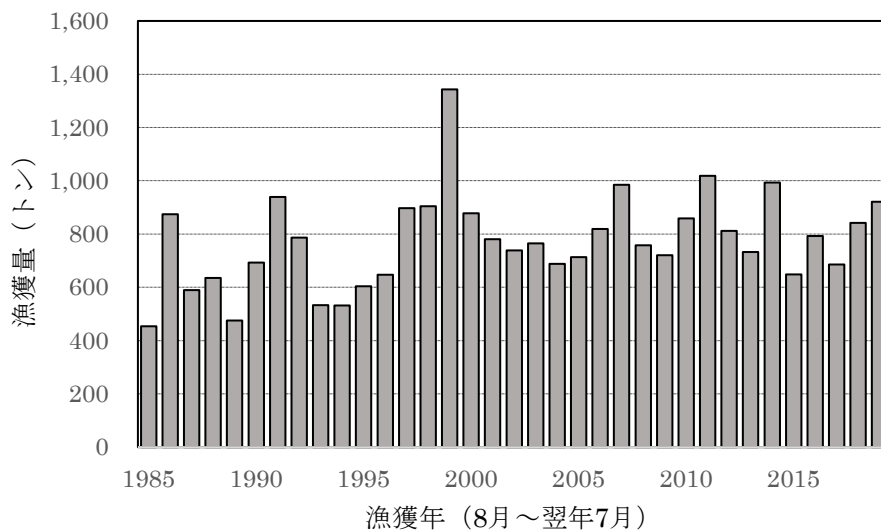


図1. 北海道の日本海～津軽海峡海域におけるヒラメの漁獲量の推移（和田 2021 を改編）

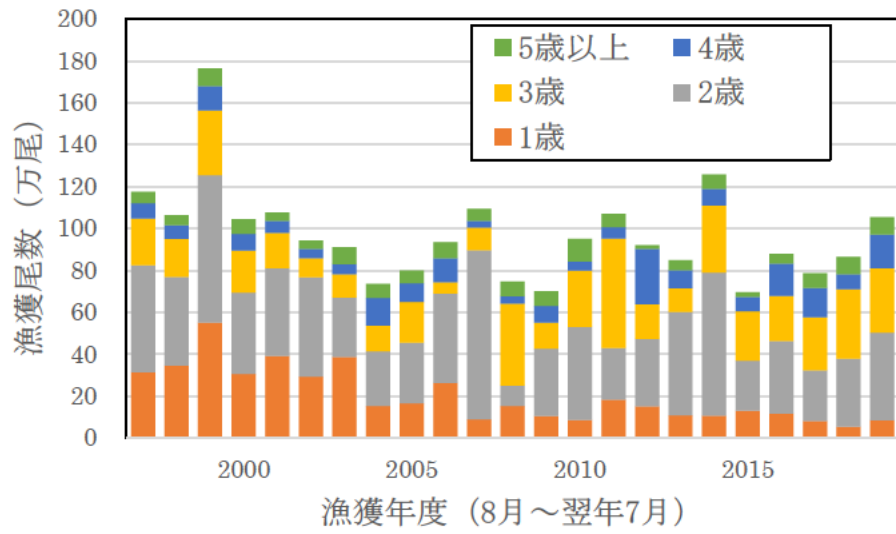


図2. 北海道におけるヒラメの年齢別漁獲尾数の推移 (和田 2021 を改編)

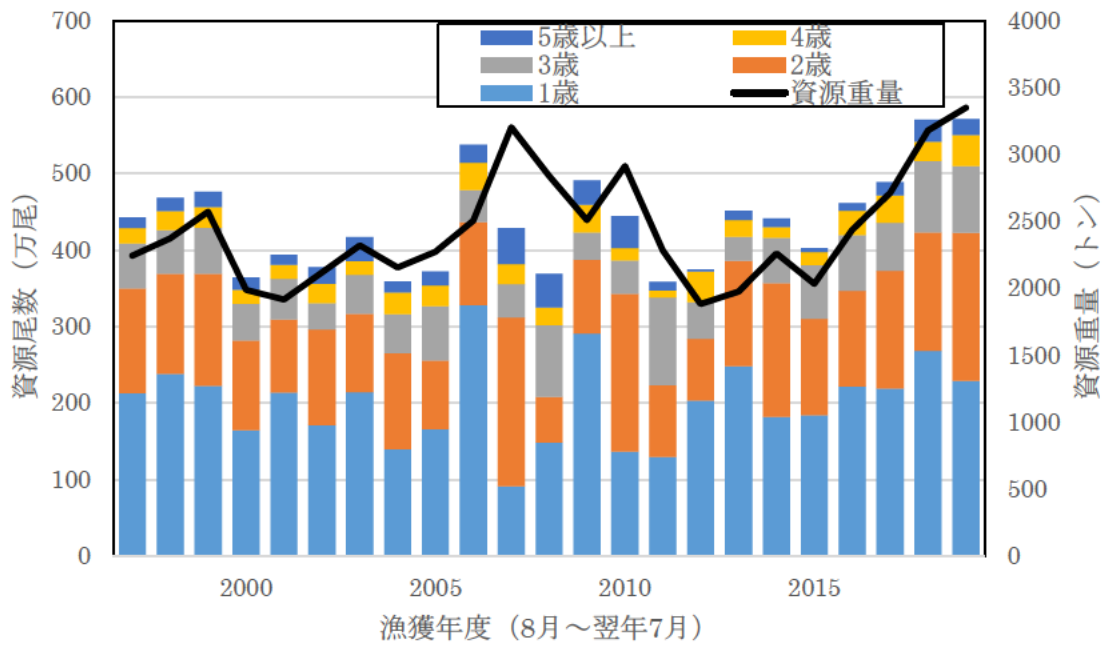


図3. 北海道におけるヒラメの年齢別資源尾数および資源重量の推移 (和田 2021 を改編)